

思春期の子どもたちとの心の距離に関する研究 ～面接相談からみえてくる子どもの姿と心の動きをとおして～

三重県教育委員会事務局
研修企画・支援課
研修員 中山 映美

I 研究の目的

昨年度の研究では、プレイセラピーから見えてくる子どもの姿と心の動きをとおして、子ども自身のもつ力を尊重したかかわり方について考察した。セラピスト (Th:治療者) や教師は子ども自身が本来もっている力の芽を摘み取ることなく、育て、高め、子どもに従っていくかかわりを続けていくことが大切であると感じ、そのようなかかわりを教育相談で出会う子どもたちとの間で継続してきた。

相談室にはさまざまな年齢の子どもたちがやってくる。筆者は特に思春期の子どもの面接相談において「心が近い」「心が遠い」という感覚を体験することになった。これは、相談室だけでなく学校現場における子どもとのかかわりでも起きているものである。一方で、子どもも私たち大人との間にそのような「心の距離」を感じていることが想定される。思春期の子どもたちとのかかわりでは、子どもに従っていくかかわりのみならず、「心の距離」の存在にも目を向けていくことで、より子ども理解が進むのではないかと考えるようになった。そこで、報告書をまとめるにあたり、以下の二点について整理することを目的とした。

- ・面接相談からみえてくる子どもの姿と心の動きをとおして、思春期の子どもたちとの心の距離を実際の事例から考察する
- ・学校現場における子どもとのかかわりのヒントを提示する

II 研究の内容

1 思春期の子どもたち

思春期という言葉は、もともとは医学的・生理学的に定義された言葉であり、「第二次性徴が始まってから完成するまでの期間」を指し、中学生から高校生くらいの年代を表現する言葉として使われる。エリクソン (1989) は、この時期に相当する発達課題として、アイデンティティの獲得を示している。「私は何者なのか」「いかにして生きていくか」などの自分に対する問いかけと、周囲の大人の価値観を問い直すことを繰り返しながら、アイデンティティを獲得していくのである。それとともに、これまでの育ちの中で積み残してきた発達課題に取り組んでいくことにもなる。

また、思春期のテーマのひとつとして、心理的自立が挙げられる。子どもは自立の過程で親への反抗をとおして対等な関係を主張するようになる。一方では、分離に不安を感じ親への欲求として甘えが生じる。この相反する感情や態度はアンビバレンス (両価性) と呼ばれ、自立と依存の間で揺れる葛藤をよく表している。

2 心の距離

筆者は自らの体験から、教員と子どもの間には絶えず心の距離が存在していることに気づいた。そして、心が遠くに感じられるから2人の関係は疎遠だとか、心が近くに感じられるからよいか、そういうものではなく、その時々で適切な心の距離というものがあるのではないかと予想した。しかし、その距離は自らのセンサーをとおして感じているものであり、何らかのものさしで測ったり目に見える形で表したりするのは難しいものさしという感触も筆者はもっていたのである。

これまでも心の距離に着目した研究は行われてきたが、それらから事例研究をとおして実践的に心の距離を考察する方法として応用できるものを見つけることができなかった。そこで、面接相談の場面で重要だと思われるやりとりを注目し、応答を検討するという独自の方法で心の距離の考察を進めることにした。その際に、河合 (2003) が著書『臨床とことば』で少年との面接場面において5つの応答を挙げ、それぞれの応答について少年の気持ちとの心の距離を検討している部分を参考にして、本研究でも重要だと思われる相談場面において、5つの応答を挙げ、それぞれの応答について子どもの気持ちと心の距離を検討した。

(様式4)

3 面接相談の場面から

教育相談で出会った子どもとの面接相談の場面を4つ取り上げ、それぞれ不安、親しみ、興奮、信頼のファクターをもとにして心の距離を考察した。

場面1では、子どもの心の動きを不安というファクターを用いて表した。すると、不安が弱いほど心の距離は近くなり、不安が強いほど心の距離が遠くなることがわかった。さらに、重要な場面での応答を検討したところ、子どもにとって不安が和らぎ、心の距離を近づけていく応答として〈そんなこと言われても、困るよねえ〉が適切であったのではないかと推察された。

場面2では、子どもの心の動きを親しみというファクターを用いて表した。すると、親しみが弱いほど心の距離は遠くなり、親しみが強いほど心の距離が近くなることがわかった。さらに、重要な場面での応答を検討したところ、親しみが増し、心の距離を近づけていく応答として〈ひどいけど、そうだなって思うんだ〉が適切であったのではないかと推察された。

場面3では、子どもの心の動きを興奮というファクターを用いて表した。すると、興奮が弱いほど心の距離は遠くなり、興奮が強いほど心の距離が近くなることがわかった。しかし、興奮状態が続くとエネルギーが失われ、疲労もする。だから、重要な場面では、ほどよく興奮を冷まし、心の距離を近すぎず遠すぎない状態にする応答を検討したところ、〈叫んでみたいこととかあるの?〉が適切であったのではないかと推察された。

場面4では、子どもの心の動きを信頼というファクターを用いて表した。すると、信頼が弱いほど心の距離が遠くなり、信頼が強いほど心の距離が近くなることがわかった。さらに、重要な場面での応答を検討したところ、信頼が増し、心の距離を近づけていく応答として〈なんか、いろいろ大変なんだね〉が適切であったのではないかと推察された。

4 適切な応答が創り出す心の距離とは

面接相談場面1~4の考察から導き出された適切な応答が創り出す心の距離は以下のとおりである。

場面	(適切な応答)	(適切な応答が創り出す心の距離)
1	〈そんなこと言われても、困るよねえ〉	課題から目をそらすことなく、かつやわらかい雰囲気を広げることで、心の距離を近づけていく
2	〈ひどいけど、そうだなって思うんだ〉	心の中で扱われているであろう複数の要素を扱っていくことで、心の距離を近づけていく
3	〈叫んでみたいこととかあるの?〉	段階を追って子どものテンションに合わせていくことで、心の距離を近すぎず遠すぎない状態にする
4	〈なんか、いろいろ大変なんだね〉	話題の表と裏の全体を包み込むような表現で気持ちを伝え、子どもとチャンネルを合わせることで、心の距離を近づけていく

面接相談で生じるやりとりは、一つひとつの応答が積み重なったものである。その応答の一つひとつが心の距離を創っていく。Th は実際の面接相談で子どもを目の前にして瞬時に応答を考え、相談後にも応答の検討を繰り返すことで子どもとの心の距離を築いてきた。本当は気に留めてほしいのに平気なふりをしてきた子どもは、面接相談を続けていくうちに、「今、こんなことが大変で…」「〇〇が気になってるんだ」といったような姿を見せてくれるようになり、Th としては嬉しく感じた。心の距離に目を向けてやりとりを重ねていくと、確かに子どもの育ちを感じることができ子ども理解が深まった。

また、導き出した「適切な応答が創り出す心の距離」をもとに、学校現場での事例を想定した。それらは学校における子どもとのかかわりに活用していけそうであるので、報告書にはかかわりのヒントとして提示した。

III 成果と課題

心の距離は、目に見えるものではなくものさしがあるわけでもないので、一般化して述べることは難しい。実際にその場その場で判断しつつ応答を重ねていくことが、心の距離を案じながら子どもとの関係を築いていくことになる。子どもからもらったかけがえのない学びは、しっかりと心に刻みながらもそのみに頼ることなく、目の前の子どもと向き合っていくことが大切である。

今後も、学校現場において目の前の子どもたちの様子を教育相談的な視点で語り合っていくことを積み重ねながら、教員をはじめとする子どもをとりまくさまざまな方々と一緒に子どもたちの育ちを見守り続けたい。